

説明的文章(1)

◆指導ページ P.2～5◆

【指導のポイント】

説明的文章では、筆者の主張を読み取るために、論理の展開をつかむ必要がある。論理の展開を理解するためには、形式段落の要旨をとらえるだけでは不十分であり、形式段落の相互関係をつかむ必要がある。形式段落の相互関係は、接続語や指示語に着目することで、意味上の形式段落のまとまりを理解することができる。

例題の板書例

■導入＝話題の提示

天才の発想法の特徴：「組み合わせ」の発見

■説明＝「ひらめき」

アンリ・ポアンカレ：数学者・天文学者

・著書「科学と方法」：定理の証明についてのエピソード

◎独創＝新しく有用で美しい「組み合わせ」の発見

■「ひらめき」がうまれる過程

ひらめきやインスピレーションは突然襲ってくる↓寝ているとき・休息中

◎直前までさまざまな「組み合わせ」を繰り返した結果

=

大部分は不毛だが〔努力〕↓「ひらめき」となる

↓事前の意識的活動

■「ひらめき」がうまれた後

裏付けるための証明やチェックが必要↓ひらめきがだめな場合もある

↓事後の意識的活動

■筆者の考え

◎事前の意識的活動…ないと「ひらめき」はありえない

◎事後の意識的活動…ないと「ひらめき」は「空想」でおわる

重要語句

○不毛＝この文章で使われている意味（成果が望めない様子）

演習問題の板書例

■話題

生きているということ

■起

産まれたときからありとあらゆるものをくみ取りながら、やっと生きている

人間が生きるためには、けなげなまでの大きなエネルギーが消費されている

↓・軽々しく「自分は生かされている」などとは言えない

・自分の命を自分の意志で放棄することは、許されない

■承

生きているというだけで価値ある存在である

↓・必死で努力していること

・自然によって生かされていること

・たくさんのものに支えられて奇跡的に生きているということ

■転

人間は憂うつな日々の中で、自分自身を励まし生きていかなければならない

前には大したことに思えたことが、後にはつまらないことに思えてくるというよ

うな変遷を繰り返しながら、生きていかなければならない

←

砂のなかに張り巡らされた根からエネルギーを吸収しながら、この命を支えてきている

■結

繊細で、気の遠くなるような努力、さまざまな奇跡的なことによって、今を生きている

命のけなげさを思うとき、自分に対する尊敬にさえも感動せずにはいられない

重要語句

○犠牲＝ある目的のために損失となることをいとわず、大切なものをささげること。

また、そのもの。

○偏見＝偏った見解。中正でない意見。

○変遷＝移り変わること。移り変わり。変転。

2

説明的文章(2)

◆指導ページ P.6～9◆

【指導のポイント】

説明的文章を読み取る上では、形式段落ごとの要点をおさえることで、形式段落の意味のまとまりをとらえ、全体として筆者の主張や意見・考え、つまり要旨をつかむ必要がある。筆者の主張や意見・考えは、文章の展開にあたって最初に述べられる場合と最後に述べられる場合、最初に述べて別な表現で言い換えて改めて最後にまとめる場合などがある。

例題の板書例

重要語句

- 好例⇨特定のことがらに適した例のこと。
- 潜在能力⇨表面に明らかにされていない能力のこと。可能性。

■話題

ジャン・アンリ・ファールブル⇨フランスの昆虫研究家

三十二歳 一生をかけて昆虫の研究をしようという決心
八十七歳 「昆虫記」全十巻を書き上げる

⇨ 自己実現の好例

■筆者の考え

○自己実現

(例) 小さいころからなりたいたい職業につく⇨本当の意味での自己実現ではない

⇨ **本当の意味** ⇨自分自身になる過程⇨ **自分の可能性を十分に伸ばす過程**

⇨ **すべての生物体** ⇨ただ一つの欲求⇨ **自分自身の潜在能力を実現したい**

○人間 ⇨ **自己の本性を実現する** ⇨ **難しい仕事**

⇨ **精神は死ぬまで成長** ⇨ **死ぬまで伸び続ける可能性**

⇨ **十分に開花させる過程** ⇨ **自己実現**

演習問題の板書例

重要語句

○マンネリズム⇨思考や行動、表現などが特定の型にはまり、独創性がなくなること。

■問題提起

友人関係とは何か

■筆者の考え

友人 ⇨人間を **変える** ⇨ **相互の人間改造**

変化の力 ⇨どこから出てくるのか?

友人関係 ⇨ **あたらしい共通項を築造** ⇨ **自分と異なるもの⇨刺激**

「つきあい」⇨ **師弟関係・夫婦関係** などの関係でも同様に理想的

相互に異質であることの確認⇨ **刺激から学ぶ** ⇨ **相互学習**

友人関係 ⇨ **新鮮さがなくなる** ⇨「なれあい」「マンネリズム」

⇨ **避ける** ⇨ **には?**

⇨ **べつたりくつきあった状態をつくらない**

⇨ **ふたりの人間がつねに** **異質な部分** を用意⇨ **相互刺激の可能性** 持続

⇨ **相互拘束しない** ⇨ **つねにあたらしい存在**

【指導のポイント】

詩歌では、作者の感動が最小限の言葉で表現されている。最小限の言葉で表現するために、読み手に感動を伝える目的で、さまざまな表現技法が使われる場合や、構成に工夫が行なわれている場合が多くある。作者の感動の中心は、こうした表現技法や構成、内容を手がかりに読み取ることができる。

例題の板書例

A 鑑賞文

わかりやすい語句 + 短く区切る
 〇第一連
 真昼の星：「星＝夜」という思い込み↓新たな発見
 〇第二連
 昼の星：綺麗な心＝擬人法↓詩の世界にふくらみ
 〇第三連
 星たち：真昼の星のような人がもつといてほしい

B 鑑賞文

〇冬の坂を立て掛けた：板やはしごを立てかける日常生活の経験
 ← 光景が目にかぶ
 ・自転車を押しながら急な坂をのぼっている作者のあえぎのようなもの
 ・一歩一歩の歩み

〇愉し：坂の上に広がる星空＝星座へ向けて空が立ってかけてある
 ← 星座に行きつくような気分
 ← 比喻表現＝内側から支える

重要語句

〇あえぐ＝息をきらす様子。
 〇支える＝（この文章で使われている意味）物質的にあるいは精神的に支援すること。

演習問題の板書例

1 鑑賞文

〇驚き：詩の冒頭＝大自然の情景↓比喻表現
 〇開放的な気持ち：ささぎるものない山頂
 〇さわやかな気持ち：眼下に広がる若葉
 ← 作者の心情を想像＝詩をより豊かに楽しむ

2 鑑賞文

〇人間
 〇独楽：見慣れた玩具↓歌人＝ものを見る目
 自身の意志で生まれてこなかった
 ← 生まれてのちは自分で生きてゆくしかない
 ← いつか迎える死
 ← いつかは回転が止まる独楽

〇一心澄みて音を発せり
 ↓独楽：うまくまわって静止しているように見える＝最も充実した時間

4

小説文

◆指導ページ P.14～17◆

【指導のポイント】

小説文で作者が読者にもっとも伝えたいことを読み取るには、登場人物の心情の変化に着目する必要がある。登場人物の心情を直接表現する語句のみならず、会話や人物の表情・動作などの登場人物の様子を描いた部分からも心の動きを推量することができる。さらに、場面の描写からも登場人物の心情を読み取ることができる。

例題の板書例

○雪に閉ざされる⇨雪によって外部と連絡ができない状態になること。

重要語句

■登場人物

光子
お母さん

■時

一月十八日 猛吹雪⇩冬

■展開

- ・光子…猛吹雪で学校が休み⇩嬉しい
- ・お母さん…光子に同調しない⇨光子を甘やかさない⇩雪は嫌だ

雪によって 家の中⇨に取り残される

雪に閉じ込められた状況

- ・お母さん…心配していない
- ・光子…不安な状況も わくわく⇩冒険の蜜の味

⇨うっとりしながら備蓄された食料を思い浮かべる

⇩母親と二人きりで過ごす幸福

演習問題の板書例

○檄を飛ばす⇨自分の主張や考えを広く人々に知らせ同意を求める。また、それによって人々に決起を促す。

○渴望⇨のどが渴いたとき水を欲するように、心から望むこと。切望。熱望。

重要語句

■恵

家出を考えている

⇩母の行動を批判

〈母と大げんかした理由〉
島の外の高校に進学したい

⇩母は反対

自分の気持ちを 理解してもらえない

■千波

恵の言葉に おどろく

恵…家のこと+勉強

⇩よくやっている

⇨自分も島の外の高校に行きたい

⇩親に打ち明けられない

⇨打ち明けた恵に 同情

手をにぎり合う⇨おたがいに励まし合う

随筆文

◆指導ページ P.18～21◆

【指導のポイント】

随筆文は、筆者の体験や見聞を通じて、筆者の考えや意見が読み手に伝えられる。筆者の体験や見聞なのか、それとも筆者の考えや意見なのかを区分して読み取る必要がある。また、筆者の個性的な価値観やものの見方が文章表現の構成などにあらわれることもある。筆者の価値観などにも着目することで、さらに正確に主旨をとらえることができる。

例題の板書例

○錯乱Ⅱ(この文章で使われている意味)考えや感情が入り乱れて混乱すること。
○真価Ⅱものの持っている本来の価値。

●重要語句

■話題
昆虫採集の網の話

■展開
◎中学二年生の夏休み
父…捕虫網に墨で住所氏名を記入
「一寸之虫五分之魂」

☆固有名詞
・虫…「固有名詞」がない
・人間…「固有名詞」がある

☆「集合名詞の一員ではなく、固有名詞として生きろよ」
↓個人の夢や希望がある一人の人間
Ⅱ自分なりの人生を大切に生きてほしい

◎青年になったころ
私…今日はどんな目に遭うかと過ごすうちに、ひどい神経症にかかる
父…私を呼び、目の前の紙に一本の線を引く

問題を時間軸に並べさせる
心配ごとを縦に並べてみられないか
Ⅱ今の問題はたった一つだから直面する問題とだけまず闘う

↓父の教え
今の私Ⅱ父の年齢
↓真価がわかる

演習問題の板書例

☆結論
・ほんとうに浴びたい声は、だれかの存在そのものであるような声
↓わたしのみを宛先としている声
Ⅱ浴びることで、まぎれもない(わたし)になる

■前置き
ふだん間近に見ることのないひとたちを観察するのは、ささやかな愉しみであった

■展開
☆筆者が目撃したほほえましい光景
絵本をめざとく見つけた幼児が母親におねだり

母親は絵本を手に取り、読み始める

子どもは途中からとなりの子のおもちゃが気になる

母親が子どものよそ見に気づいて本を閉じると子どもは再度おねだり

母親はため息をつきながらも最初から読み始める

子どもはまたもとなりの子の遊びを注視

気づいた母親が読むのをやめると子どもはせがむ

☆聞く気がないのに「読んで」とせがむ幼児の心理に疑問

☆筆者の心理分析
母親の声がじぶんに向けられているということが大事Ⅱ母親の肌の肌理
↓独占的に、母親の意識の宛先になっているという状況に浸っていたい

☆子どもたちに読み聞かせようとして朗読の練習に通う中高年の方々
↓筆者は首をかしげる

☆子どもが朗読に求めているもの
×・だれが聞いても耳あたりのよい声
○・声がまぎれもなくじぶんに向けられていること
・じぶんがだれかにたいせつにされていると感じられること

☆子どもが学校に通うようになる
・親の声が社会のいちばん前の声が変わってくる
↓社会に属する一人に向けた声Ⅱ子どもが社会の中に置かれる
・話す方も聞く方も、社会の(標準)という枠組みの中で語りだされる

【指導のポイント】

古文では、話の内容を大づかみにとらえることが最初に求められる。次に、古文の特徴として主語や述語・助詞が省略されている場合が多いので、適宜補いながら文の意味を正確に読み取る。また、古文で使われている語では、現代語と意味の異なるものがある。そのような語の中で問題文として頻繁に引用される文で使われているものは、意味を正確に覚えておく必要がある。

例題の板書例

■人のうわさ話

山奥の猫また：人を食べる

←

山でないところへんの年を経た猫：猫またになって人を食べるのだろうか

■行願寺あたりの僧

「猫また」のうわさ話を気にかける

←

ある日、夜更けまで連歌し、一人で帰る

←

うわさ話の猫またに飛びつかれる

←

僧は驚いて転がって川に入る

←

連歌の懸賞品は水につかるが命は助かる

←

◎「猫また」の正体＝僧の飼っていた犬

↓ 飼い主の僧を知って、飛びついただけということ

重要語句

○連歌＝五七五の句の後に別な読み手が七七をつけて、さらに別な読み手が五七五を続けてつけていく歌をよむ形式のことである。鎌倉時代から江戸時代に、数人から数十人でおこなわれた。

演習問題の板書例

1

■展開

太郎入道

出家前↓いつも猿を射る

ある日

●大猿：追いつめられ、木のまたのところで太郎入道に射られる

←

大猿が木のまたに子ざるをおこうとする

母との愛情

母親の愛情

母親を思う気持ち

●子ざる：母親にしがみつき、母猿といっしょに木から落ちる

●大猿とはなれたくない

●太郎入道：それから長い間、猿を射ることをやめる

2

■展開

◎丹後守保昌が任国へ行く途中の与佐の山

白髪の武士：道のかたわらに馬を留めていたが、馬からおりない

保昌の家来：無礼なので白髪の武士を馬からおろそうとする

保昌：家来の行為を止めさせる↓(理由)馬の留め方が猛者のものだから

◎さらに進むと大矢の左衛門尉致経と出会う

大矢の左衛門尉致経：白髪の武士＝自分の父親「平五大夫」＝礼儀を知らないもの

↓ 丹後守保昌への対応↓不作法があればわかる

保昌：白髪の武士がただ者でなかったことに納得する